第六章　特別研修事業

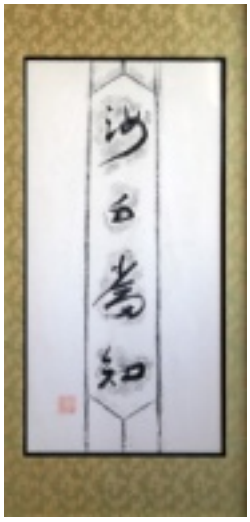
宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌　お待ち受け百日聴聞会
百日聴聞会報告　144
百人の先生の言葉　148
満講の集い　157
講師一覧　159
真宗本廟奉仕　並　親鸞聖人聖跡巡拝　162

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌
お待ち受け

百日聴聞会

平成二十三（二〇一一）年は親鸞聖人の七百五十回御遠忌の年でありました。勝福寺では親鸞聖人のみ教えを学ぶ御遠忌にしようと、平成二十一（二〇〇九）年一月より平成二十三（二〇一一）年十一月まで、三年かけて「百日聴聞会」を開催しました。

その経緯や内容について住職が「崇信学舎同人会」で発表した『百日聴聞会報告』がありますので、それをはじめに収録しておきます。続いて、先生方のお言葉の抜粋を『響流』に載せておりましたので、それを収録しました。最後に、聞き書き担当者の声や、百日聴聞会の参加者の声を、『如是我聞』や『響流』から取り上げておきます。



『百日聴聞会』報告

藤谷知道

百日安居（あんご）

このたびの百日聴聞会には、ここに至る前の歴史があります。坊守と横川久美代さんが出雲路先生の十三回忌にお参りした帰り道、「出雲路先生たちが暁烏（あけがらす）先生の七回忌に向けて百日安居（僧が一室に籠り、講経や坐禅に専念し修行すること）をされたように、私たちも蓮如上人五百回御遠忌に向けて百日安居ができたらいいね」と思い立ったことから話が具体化して、十三名の仲間で百日安居をすることになりました。

その時の記録を見てみると、二〇〇一年五月十九日から二〇〇二年三月十四日にかけて行っています。それぞれ事情がありますので、連続して百日間はできません。それで一月に二回、一回五日間くらいの日程で、一年かけてやりました。一日の日程は午前九時から午後十時まで、主な内容は、午前中は自習、午後は聖典素読、夜は輪読と座談です。私はお参りなどで出られない時も多かったし、お仕事のある人は夜だけの参加でした。

汝自当知（にょじとうち）の会

この百日安居が終わった時、生活を共にしての聞法が楽しかったので、引き続き何かをしようということになりました。話し合いの結果、毎月二日間、午後の二時から翌日の午後四時まで、生活を共にしながらの聞法をすることにしました。私どもが開法するお内仏の間には暁烏先生の揮毫（きごう）された「汝自当知」の拓本が掛かっています。その言葉を頂いて会名を「汝自当知の会」としました。

参加者は十数名ですが、僧分のものは黒衣墨袈裟、ご門徒は肩衣（かたぎぬ）で、順番に調声人となって「正信偈」三淘（みつゆり）和讃で勤行して始まります。その後、横川香正さんに聖徳太子の講義をしていただき、続いて『歎異抄』を学んだり、『蓮如上人御一代記聞書』を学んできました。ほかに仏教讃歌を歌ったり、岡本照子さんたちがお野菜を差し入れてくれるので、毎回美味しい料理が並んだりします。

遠くから来る方々は泊まり、近所の方々は翌日の朝九時に再び集合して四時までと、ずいぶん長い時間なのですが、不思議なことにあっという間に二日間が過ぎていきます。実は多士済々というか、私たちの僧伽には苦悩をいっぱい抱えた人が何人もいて話題が尽きません。何回やっても、どこまでやっても、いつも話題が生活に戻るので飽きもせず、時間を持て余すということもなく、聞法が続いておりました。

そういう形での聞法の最中にも「もういっぺん百日安居がしたいね」という声が出たりしていましたが、簡単には思い立てませんので、「そのうちに」と先送りしてきました。そんな中

で宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えすることになり、どのようにして御遠忌を迎えるかが課題になりました。

その結果、これまでの「百日安居」も「汝自当知の会」も自分たちだけでやっていましたので、今度は先生をお迎えし、多くの人々と一緒に親鸞聖人の教えを聞いていこうということで百日聴聞会を思い立った次第です。

如来さまからの招待状

百日聴聞会は勝福寺の本堂を会場に、毎週土曜日の午後二時から三時半まで（途中から一時半から三時半まで）ということで始まりました。土曜日といっても用事がある場合は休んで、三年かけての計画でした。

第一回目は二〇〇九年一月十七日、酒井正知先生の「帰命無量寿如来」。最終回は二〇一一年十一月二十六日、児玉暁洋先生の「南無阿弥陀仏と言う信心ー第十八願に乗託して第一願に生きるー」でした。

百日聴聞会が満講になり二〇一二年の一月九日に「百日聴聞会・満講の集い」をしました。その日は、二十七名の方が参加して、午前十時から午後五時くらいまでかけて、百日聴聞会で私は何を聞いたのか、前もって考えてきたことを一人ひとり発表しました。その日参加できなかった四名の方が原稿を寄せてくれていますので、三十一名の「私の如是我聞」ができております。

その中で佐藤麗子さんという方が、百日聴聞会通信「如是我聞」第一号を読んだ時「この聴聞会は如来様からの招待状」と受け取ったと言われました。佐藤さんがもった「如来様からの招待状」という感覚は、百日聴聞会が終わった今、みんなも共有できたのではないでしょうか。自分たちが行ったというよりも、親鸞聖人から願われてこの会は成就したのだなあ、如来さまから願われていたのだなあ、と感じました。

いろいろな工夫

百日聴聞会では色んな工夫をしました。できるだけ続けてもらえるように、出席表やハンコをデザインして、参るたびにハンコを押していきました。それから百日聴聞会用の御袈裟を作って二十回以上お参りした方からあげていきました。結局、全回聴聞した方は三名。九十回以上が十名、八十回以上が五名、七十回以上が六名、六十回以上が四名、五十回以上が二名、四十回以上が十名おります。また一方で一、二回で足が遠のいた方もずいぶんいました。続くか続かないかというところには、我々の責任もあるのですが、やはり宿縁の有無ということが大きいように感じております。

当番日誌に人数を書いていましたので調べてみましたら、延べ五三三八名の方がおまいりされていました。平均すると一回五十三名の参詣になります。

『如是我聞』を発行

歳をとると聴いたはしから忘れていくということもありますので、第一回目から「如是我聞」という題の聞き書きを作りました。初めは一頁立てだったのですけれど、三十回目くらいから両面印刷の二頁だてになりました。最初の頃は、文字通りの如是我聞で、担当者の心に残ったところで作っていたのですが、次第に全部テープ起こしをして、なるべくご法話に近い「如是我聞」を作るようになりました。「如是我聞」の

『如是我聞』第1号

聞き書きを担当してくれた人は二十名にもなります。

「如是我聞」は次回の聴聞会に間に合うようにしていましたから、毎週ある時は大忙しでした。テープ起こしを四日ほどでしてもらい、その後二日かけて私が成文化し、一日で先生に目を通してもらい、前日の夜印刷していました。結果的には百号すべて遅れることなく作成できました。

テープ起こしなどは若い者でも面倒なのに、全く未経験の家庭の主婦にはさぞや大変なことであったと思います。それなのに多くの人が楽しそうにやれたのも、先生方のお話が身にしみて聞こえてきたからではないでしょうか。心に響くことならば、たいていのことができるのですね。ともかくも今から振り返りみれば、よくぞやれたと感嘆しているところです。

会費については「三百円だって高い」と言う人もありましたが、「それじゃ仏法を軽んじすぎる」と頑張って五百円にしました。結果的には、先生方も含めて、いろんな方が御懇志を寄せてくださり、最後の頃には遠方からも先生においでいただくことが出来ました。

『如是我聞』最終号

座談会

百日聴聞会は三時半で一度終わりにしました。その後、希望者で先生を囲んで座談会をしました。そして、遠くから来て泊まっていってくださる先生方の場合は、夜の部がありました。夜の六時過ぎに一品ずつおかずを作ってもちより、お酒も飲みながら会食をしました。食事が終わってからは十時過ぎまで座談会をやりました。楽しくもあり有難くもあった夜の座談会でした。

先ほども言いましたが、私たちの僧伽を生き生きとさせてくれているのは、世間では上手に生きられなくって、つまはじきされたり、引きこもったり、そういう方々の存在です。助かってしまわない人たち、有り難くなってしまわない人たちが、判ってしまい、助かってしまいがちな私たちを凡夫の事実に連れ戻して下さるから、僧伽の空気がよどまずにすんでいるように思います。

百人の先生

最初は、三、四十回すると先生がおられなくなるだろうと思って、「五十回すぎてからまたお願いします」と言っていたのですが、次々と先生方を紹介していただいて結果的にはちょうど百名の先生にお話いただきました。

先生方の内訳をいいますと、在家の方が二十五名おりました。在家の方々の仏法に出会った感動は、聞かれている方々の心にもっとも強く響いていたような気がします。それから女性の方が十八名。お西のお坊さんが八名。変わったところでは戦争放棄をずっと掲げてきたメノナイトというキリスト者の牧師さん。それから、チャンウェイ（張偉）さんとマイケル・コンウェイさん、二人の外国出身の方。いろんな方が来てくださいました。日豊教区以外からも四十五名おいでいただいております。後半になればなるほど、少々遠くってもよき先生方からお話を聞きたいという気持ちが強くなっていきました。

百日聴聞会でいただいたもの

満講の集いで発表された「私の如是我聞」を少し紹介いたします。

Uさんという心の優しい女性がいます。彼女にとってこの世は大変なところなんでしょう、高校の時から二十年近く引きこもっていたそう

です。今は痴呆症のお母さんと二人暮らしをしていて、心細くなっては「死にたい」と口癖のように言います。その彼女が、「たくさんの先生方のお話を聞かせていただく中で感じたことは、私という人間は、如来様のおかげで生かされているのだということです。…そのことに気づきもしないで、私は駄目な人間です、といたずらに自分をいじめてきましたが、私は自分をいじめているようで実は如来様をいじめていたのです。たとえなんの取り柄もない自分でも、自分の命を自分の所有物としないで、如来様の命と拝んでいけたらと思います」と、こんなことを語ってくれました。

Kさんという元気のよい方がおられます。感情豊かな方で、喜びも腹立ちもそのまま出てしまい、よく人とぶっつかってはそのことで苦しまれています。その彼女が満講の集いで「考えては消え、考えては消え、最後に残った頂きものは、どこまで聞いても不平不満を言う私」というなずき、「だからこそ、また一から歩き始めるより外ない」と述べてくれました。

Mさんという方がいます。彼女は今もリストラに抵抗しながら工場で頑張って働いているのですが、池田朋行さんが作詞作曲して歌った「願生(がんば)る」という曲に感動し、「これからは肩肘張って生きる頑張る生き方でなく、願いに生きる願生(がんば)る生き方をしたい」と言っておりました。

『崇信』にも時々便りが出ているOさん。この方は「会を重ねるごとに驚きや感動が薄れ、座談会に残るのが義務みたいになった」と言ってくれました。「座談会では自分で了解したことしか言えず…恥ずかしいなという思いが残るばかりでした。『同行の前にて喜ぶなり、これらは名聞なり』と蓮如上人様がおっしゃる言葉も私のことです」と。そんな彼女の最後の言葉は「いただいた命、自分だけでなく共に生きていきたいという生き方はどのような生き方か、そのことのためにこれからも聴聞させていただきます」でした。

坊守の言葉を紹介すると、「多くの方々のご支援とご参加によって歩みが進められ、遂に満講の日を迎えることが出来ました。まるで急流を流されていったような感がするのですが、如是我聞に刻まれた足跡を復習するとき、なんという尊い聞法の会座に招かれたことだったかと、愚鈍な身にもいささか感慨を覚えています」で始まり、最後に「千歳(せんざい)の暗室の喩(たと)えのように、久遠劫来(くおんごうらい)の流転(るてん)の生に終止符を打つ仏縁を今いただいているのだ、「一生聞法怠ることなかれ」と時々に自戒しつつ、この道にいのち果てて行きたいと念じます」という言葉で締めくくっています。

一闡提(いっせんだい)の私をいただく

百日聴聞会を始めるにあたり、私の人生も後三年と覚悟して聞いていこう、と思いました。しかし、そういう思いは一年経つと薄れていき、二年目には忘れてしまいました。なんともしまりのない軽々しさであります。結局、この百日聴聞会を通して、いよいよ一闡提の私であることを知らされました。今は一闡提の私となって南無阿弥陀仏と申させていただいています。

百日聴聞会が満講を迎えたとき、いろんな方が「百日聴聞会が成就でき、おめでとう」と言って下さいました。しかし、私の中には「成就した」という感じはありませんでした。それはたぶん、私だけの感じではないと思います。何人かの方が、「終わったという感じはひとつもないね」と言っていました。

百日聴聞会では先生方が一生かけて獲得された世界をお話しくださったわけです。だから、ちょっと聞いたぐらいで先生のお話を受けとめきれるわけはない。あえて言えば、まだ何にも聞き取れていない。ですから百日聴聞会の終わりは、先生方からいただいた尊い世界に出遇っていくための新しい歩みの始まりです。

これからも変わらぬご指導をお願いして、ご報告を終わらせていただきます。

百人の先生の言葉

―「如是我聞」抜粋―

百日聴聞会では、ご法話の要旨を「如是我聞」として毎回発行してきましたが、その「如是我聞」から、先生方のお言葉を一つずついただき、『響流』の七十二号から七十四号に掲載しました。それを以下に再録しておきます。

親鸞聖人も法然上人との出会いによって如来の声をいただけた。頭が下がる人に出会わない限り「南無阿弥陀仏」はいただけないのです。

（第1回・酒井正知）

人生の最期に仏さまを讃えることが出来たということは、生まれてきて良かったと言えたということですね。

（第2回・武内和朋）

親鸞さまは、教えに出会い、罪深い自分自身を知らされ「愚禿」と名告らずにおれなかったのです。

（第3回・鍛治谷栄）

個人的なところにとどまっている悲しみは暗い。親鸞聖人の悲しみは広がりをもった深さがある。悲しみは私を超えている。悲しみによって私が開かれていく。

（第4回・藤谷知道）

二河白道の「汝、一心正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん」という言葉が声になって聞こえた。その時はじめて頭が下がった。逆らう者、逃げる者でも決して見捨てない、阿弥陀様のお慈悲なんだと。

（第5回・原寛孝）

「南無阿弥陀仏」は単なる人間の言葉ではなく、浄土の蓮池に咲く華である。

（第6回・前田伊佐人）

細川先生は、主人を亡くし悲惨のどん底にいた私が愚痴のありたけを申したら、慰めて下さるのでなく、「その悲しみが喜びに変わりますよ」と言われました。

（第7回・松岡フミ）

住岡夜晃先生は、正しい信仰のない人は病人だと言われました。何の病気か？　それは、知恵の病気です。仏教ではそれを無明の闇といいます。

（第8回・横川香正）

ある老人の方は、お念仏申したあと「ようこそ、ようこそ。さても、さても」と。「ようこそ、ようこそ」は仏の呼び声、「さても、さても」は私のうなずきです。

（第9回・後藤正純）

私たちが聖人の教えをたずねていって、微笑（ほほえみ）ながら「本当に自分は生まれてきてよかったなあ」と人生をいただくことができたら、それが念仏をいただいたことだと思います。

（第10回・津垣慶哉）

自力の教えは、必ず「ぞー」を残します。「オレがこれだけしてやったぞー」「私が頑張ったぞー」。一生懸命やっても、残るのは執着心です。

（第11回・長野淳雄）

悲しみも苦しみもすべては如来の、私を目覚めさせようとの深い思し召しのお育てでございました。

（第12回・小若女弘子）

如来の智慧は、煩悩で苦しむほかない凡夫の相を観たとき、助けずにはおれないという慈悲に成るのです。

（第13回・藤枝宏壽）

お念仏は「見てござる、聞いてござる、知ってござるのお呼び声」ということを、しみじみと感じています。

（第14回・佐藤修水）

人間とは愚かな存在なんだ、と。そんな愚か者を地獄まで下りて救い取って下さるのが阿弥陀さまなんだ、と。真宗門徒は生涯かけてそれを聞き取り「お互いさま」と言う深い精神性を生きてきたのです

（第15回・陶山法水）

親鸞聖人のご一生は「まこと」を求め続けられたご一生でありました。

（第16回・渋谷円）

「迷える衆生よ」、これは私に対する如来様の呼びかけの言葉です。直接に、私一人にまっすぐ呼びかけてくる言葉です。
（第17回・宮岳文隆）

親鸞聖人は悪人であることを喜ばれたのではないか。悪人だからこそ、ご本願が私のところに来て下さった、と。
（第18回・小袋雅文）

生活の中でふと感じる空しさは、私達にかけられている願いや課題を忘れて生きている時におこってくるのです。
（第19回・御堂成司）

今、多くの人が「居場所がない」と苦しんでいるが、それは錯覚でないか。私がここにいるのはいろんな人のおかげ、恩徳であります。
（第20回・平野喜之）

御本山に行って親鸞聖人の御影の前で、「今まで歩き続けた道のりは、どうですか」と問われ、思わず涙が出てきました。金の亡者で生きてきた私は大切な物を見落としていたと、はじめて気づかされました。
（第21回・市江康生）

「そのままのおたすけ」と聞いて「このまま」と捉えかえすのは凡夫のはからい。はからいで本願の呼びかけをつかむことはお念仏の私有化です。
（第22回・加来知之）

出雲路先生も若い頃、西村見暁先生に「そこを動くな！」と叱咤されたそうです。「そこを動くな！」とは「一切皆苦のところから逃げるな」ということですね。
（第23回・五十嵐 務）

一日を終え、お風呂の中で、大きな声でナンマンダブツ・ナンマンダブツと称えます。そしたら今日、はがいかったこと、悔しかったことも、それもまた「あゝ有難かったな」と思い直され、またもう一つナンマンダブツと念仏申します。
（第24回・武田淳子）

親鸞聖人は「聴」の字に「ユルサレテキク」、「聞」の字に「シンジテキク」と左訓されました。
（第25回・村上秀麿）

「終戦の日」の正午、親鸞聖人の『世のなか安穏なれ　仏法ひろまれ』と『世界に平和を　人の心に平安を』という言葉を垂れ幕に書いて、四日市別院の梵鐘を鳴らしています。
（第26回・藤谷純子）

阿弥陀さまは架空の話しではないんです。我々を生み出して来たいのちの源であり、願いと誓いをもって我々に呼びかけ、必ずやいのちの世界に目覚めさせ、帰らしめようとはたらいているのです。
（第27回・渓内弘恵）

歳を取るとともに、人生とはこういうものだと、座り込んでいないか。仏法を聞くと、座り込ませない、新しい驚きの生活を賜るのです。
（第28回・等岳文英）

仏法は「好き人」にお遇いすることが一番大切と聞いていますけど、私もおかげさまで藤原正遠先生と佐々真利子様にご縁をいただきました。
（第29回・谷 栄子）

南無阿弥陀仏の一声で浄土が来る感じになる。お浄土のはたらきに遇うから、自分は自分の出来るところで精一杯やらせてもらおうという力を頂く。ここに一生かけて花咲かせていく道がありました。
（第30回・江本 忍）

「南無阿弥陀仏」とは「たとえ、どのような私の人生でありましょうとも、この私を支えてくださって、いつでもどこでもどのような苦悩の中にあっても、私の善し悪しの迷いの心を破って事実に立たしめてくださるはたらきの仏様を拠り所として立ち上がり、歩みます」ということです。
（第31回・高岡願生）

私の中に阿修羅がいて、いつも文句を言っている。しかし仏法を聞いてきたお陰で、「丁度わるい」と煩悩が出てきたら、仏さまがその下からスッと出てきて「丁度よい」と言うてくる。有難いですね。
（第32回・武本正純）

暗いということが嫌われ、明るいことだけが受け入れられる世。涙を共有できないことで、失われていく命は決して少なくありません。末法

濁世・無仏の時と呼ばれる今、人はどこに立つのか問われている。（第33回・日野詢城）

自分の半生を振り返ったとき、お念仏が「ありとあらゆるものをつらぬいて」私のところまで届いて下さり、「存在の故郷」といわれるお浄土へ呼び帰して下さったなーと思わずにおれません。（第34回・高藤英利）

お互いが、愛おしい、よかったね、と言うところには、一人ひとりが仏さまから呼ばれているということがあるのです。（第35回・村上匡一）

一、アミダ仏　我らと共にまします。
二、アミダ仏　我らと共に　ましまして
　われをたのめと　喚びたもうなり。
三、我がために　身を捨てられし　み仏の
　ご恩受く身を　世にささげたし。
（第36回・土井紀明）

阿闍世や韋提希を、親鸞聖人は権化の仁と受け止められました。これは現代に生きる私の姿でありましょう。下品下生としか言い様のない、この私を目あての如来のご本願でありました。（第37回・尼子芳壽）

月の光は冷たいけれど、どこかあたたかい。お釈迦さまは父を殺した罪に苦しむ阿闍世王を「月愛三昧」に入って救われました。（第38回・小栗栖法秀）

「ばあちゃんのようになりたい」と言ったら、「ばあちゃんをほめてるんじゃないよ。あんたは、ばあちゃんがいただいた本願をほめてるんだよ」と言われた。そうやね。まったくそうやと思う。（第39回・加来佳子）

南無阿弥陀仏は私の声だけど、仏の呼び声として聞くのです。称名がそのまま聞名になるのです。私の先生は「念仏称うれば尊くも聞こえ来たりぬ弥陀の招喚」（住岡夜晃）と歌われました。（第40回・堤日出雄）

お念仏申すということは、智慧の光をいただくこと。だから、どんなことがあってもこの人生を引き受けられる。試験に落ちても結構。離婚してもいい。お念仏でこの人生を堂々と生きていけるのです。（第41回・太田信昭）

念仏を称えると、阿弥陀さまがはたらいてくださる。… 念仏申すと、過去が生き、未来が生き、そして今が生きるんです。（第42回・寺田正知）

凡夫の身をもって火宅無常の世界でいくらあがいても、生死を出離することはできません。いちど阿弥陀の浄土へ生まれ出て（往生）、自己の願いに目覚めた新しい私（信心）の誕生をいただき、あらためて凡夫の身と火宅無常の世を生きるものになる。（第43回・藤谷知道）

「南無阿弥陀仏」と念仏申すということは、私の生死のけりが阿弥陀さまのはたらきの中でつくということです。私たちはそのことを慶ばしていただくことが、何よりも大切です。（第44回・井上隆範）

仏さまのようなお姑さんと辛くてたまらぬ母と同じ地平に足を下ろしていたんだ、ただ経てきた生活が違うので到達した地点が違うだけだったのだ、ということが見えてきました。それは、お念仏の力のような気がしております。（第45回・渡邊愛子）

疑いの心のなかにある者が、どうして真実を求める心をおこすことができるのか。… それは「仏陀に出遇ったからだ」と。… ここから仏道の求道が始まってくるのです。（第46回・宮下晴輝）

如来の回向心というのは、如来さまの回心懺悔の心です。私たちが回心懺悔するんじゃないんですよ。如来さまが私たちに先立って回心懺悔される。それによってはじめて私たちにも回心懺悔ということがおこるのです。（第47回・高雲昌美）

私たちは、欲の心で眺める銀行の通帳ももっておりますが、「ナンマンダブツ」という通帳をもう一つもっておって、今すぐには受けとめきらないこぼれ出るものをそこに刻んでおいて、

ことあるごとに「ナンマンダブツ・ナンマンダブツ」と開いては「嗚呼」と味わわせていただくことが大事な気がします。

（第48回・池田朋行）

高史明さんのお話を聞いている時、「自分をギリギリ責めるのではない。そこには真実はない。あなたがあなたのままで、煩悩具足の凡夫のままで生きていける一本道がある。念仏の一本道だ」というお言葉が聞こえてきました。

（第49回・宮森忠利）

分かったという時は、だいたい間違っています。よう分からんけど参らせてもらおうと、身を置く場所が定まり、お念仏申せる身をいただくことが大切なことなのです。（第50回・西藤 眞）

「本当に教えを聞かんならん身やな」と聞こえるのが、聞いた証拠です。聞いて「今日は、よう分かった」じゃ、何も聞いておらんのです。聞けば聞くほど、聞かねばならない身に帰っていくのが、真宗の教えの聞き方です。

（第51回・佐野明弘）

不安もいっぱいあるし、困ったこともなかなかなくなりません。念仏は、私が仏さまを念じているようですけども、逆で、仏さまが私を念じていてくださるんですよね。これ一つを信じて、これからも聞いていきたいと思っています。

（第52回・横川久美代）

細川先生は、私達は煩悩まみれの炭みたいなものなんだが、よき師よき友を通して、僧伽という場所でいつの間にか南無阿弥陀仏の火がつくんだと、その南無阿弥陀仏が往生浄土していくんだとおっしゃられました。

（第53回・田畑正久）

昔の人は仏様のことを親様といっていた。人生が旅というのなら、お浄土という帰る家がある。そこには阿弥陀さまという親が待っていて下さる。…そのことに気づけば、安心のある人生を送れます。

（第54回・平田崇英）

自分たちだけで薬を独占しないで、苦しんでいる多くの方に本願醍醐の妙薬を、「念仏申さるべし」という言葉によって伝えるのが私達真宗門徒の役割ではないのかなあという思いがします。

（第55回・江林智靜）

「良い人」と言われる人もいるし「悪い人」と言われる人もいます。しかしその違いは、阿弥陀如来のまなざしから見ると、衣服の色の違いに過ぎません。みんなかざりです。かざりを脱いだらみな同じように三毒にとらわれている存在です。そこに、人間の悪としての存在の絶対平等性があります。私たちは阿弥陀如来の救済を同じ地平に立って待ちわびる存在です。

（第56回・張 偉）

普通は「自分のことは自分が一番よくわかっている」といいます。仏教は反対で「自分のことが一番わかっとらん」と言います。空しいとか、生きる方向がわからないとかという問題が出てくる根っこに、まさに自分というものがわかっていないということがあります。

（第57回・鳥越正道）

仏法に出遇わしていただいたご利益、仏様に育てられるという業縁をいただいたご利益、それは「我が思いからの解放」であります。

（第58回・寺本 温）

人間は生まれてくる時、光の中、喜びの中から生まれてくる。去っていく時も又その喜びの中に還っていくのではないかと思う。浄土真宗はそれを浄土へ還るといってきました。

（第59回・野呂 昶）

その人はその人で「よし」という、私は私で「よし」という、いや、「私でよし」でなく「私でよかった！」という世界です。「弥陀の本願まこと」は私たちにそういう世界を開かせたいと願い続けているのです。

（第60回・村上大純）

定年後はその競争から解放されて晴耕雨読の生活をしようと思っていましたが、いざ解放されてみると、42年前と全く同じ「虚しさと孤独」を抱えた自分がいることに気づきました。この問題を解決しなければ、結局自分の人生は虚し

さと孤独の中で終わっていくしかないと思うようになり、この四月に大谷専修学院に入学したのです。

（第61回・川島弘之）

聞くということは、私たちが生きている次元を超えた世界に触れていくことの出来る唯一の経験なんです。聞くことによってはじめて変革がおこる。仏法が聞こえた証は変わるということです。

（第62回・伊藤　元）

念仏は「ただ念仏」には違いないが、それは本願の念仏であった。本願の裏付けがあるから、こんな私にもお念仏がいただけるのである。そしてその念仏は、お浄土の阿修羅の琴が「鼓するものなくして自然に鳴るがごとし」であります。

（第63回・鍵主良敬）

復員してきた老院は、昭和二十二年に万感の思いを込めて梵鐘を再興しました。その梵鐘に「国豊民安　兵戈無用」と刻み込んだのです。駅に着いた梵鐘をご門徒の方々と丸太を敷いて転がしながら、皆の素手で鐘楼に吊され、住職の願いの音を響かせたのじゃないかと思います。

（第64回・日野敦子）

今、私が大谷専修学院の学生たちに申していることは、たった一つのことなんですね。「自分のこころの中で、なんで念仏なのかとか、いろいろな思いがおこってきたとしても、まず単純に、念仏は如来からの私どもへのプレゼントだということを信頼して、念仏申すことからはじめよう」と呼びかけています。

（第65回・孤野秀存）

ほんまの幸せは自我を満たす欲の道ではなかった。私を信じていてくださる阿弥陀さまのまことのこころに出遇うことが本当の幸せやったんやなと、今の自分に満足できることになりました。

（第66回・東岡　繁）

私達の聞法には法蔵菩薩のご修行という意味があります。この百日聴聞会も、私達にとって本当に必要なことは何かという問いをもってするならば、法蔵菩薩の五劫の思惟（聴聞）になる。聞法とは教養ではない。自分の生き方を探すことです。

（第67回・加来雄之）

大峯先生は、ビックリすることがなくなったら人間はおしまいだと仰いました。今ここに私が生きている、その感動がなかったら仏法は分からないと。今、念仏の大悲心、如来の名号に触れて頭が下がる、念仏申すところに浄土は私の足下に開かれているのです。

（第68回・酒井信也）

今から四年前、林暁宇先生が具足舎で倒れ、搬送された石川中央病院の救急治療室で医師、看護師による必死の蘇生治療が行われましたが、その時、トレードマークの髭までもが、私に「念仏忘れまいぞ」と言われているように思えました。

（第69回・東　守蔵）

太陽の中ではローソクの火は良く見えない。暗くなればなるほど、ローソクの光は輝く。自分に深く絶望し救われないとわかって初めて、救済者に出会うことができる。そういう宗教体験をしたものだけが、神や仏、浄土という人間を越えた世界に出会えることができるのです。

（第70回・佐々木淳二）

親鸞聖人は「自身を深信する」とおっしゃいます。業の自覚です。いろんな因縁の中にある身、多くの先祖から受け継いできた身、つまり社会的、歴史的業縁の身であると得心がゆくのです。現実の生活や社会や環境や歴史が、自分にとって問題となってくる自覚こそが信心なのです。

（第71回・福島和人）

私が「お父さん、私たちの四十七年はなんだったんだろうね？」と聞きましたら、腹底から絞り出すような声で、「仏さんに遇うためじゃった」と言いました。私は思わず熱いものが吹き上げてきました。夫と私が同じところに立って、仏様のおはからいの世界を生き、護られ育てられてきたことが、今、知らされたのでした。

（第72回・石塚朋子）

「我が力たのむ愚かさ知らされて　ただ念仏に安らげる日々」…　私はいつの間にか八十も半ばの老苦の身ですが、お念仏に助けられながら

の毎日です。このおみのりにご縁を頂いたことを有難く思うばかりです。

（第73回・青柳田鶴子）

夜、時間外でしたが祇園精舎の境内に入り、…フト見上げた夜空に皎々とした満月の柔らかい光を感じました。その瞬間「この月は釋尊や舎利弗、目蓮が仰いだ月と一緒」であり、二千五百年の時空を超え「いま同じ場所で釋尊の直説を拝聴している自分」に気づかせて戴いた。

（第74回・渡邊顯信）

君は眼が見えなくて辛いことがいっぱいあるだろう。でも見えても辛いことはいっぱいあるんだよ。宗教というのは祈ってなにかを変えることではない。今ここに生きていることにうなずける者になる。それが救いなんだ。

（第75回・田口　弘）

仏の大悲心というのは「あなたは、あなたで、いい」という優しい言葉のなかに内発的、自覚的な生き方を促しておられる。「何もしないで、そのままでいい」ということではない。

（第76回・池田　理）

念仏を信じるということは人間を信じるということなんです。それによって人と出会っていけるんですね。そうした出会いが豊かさを生み、自分に生きる場を与えてくれるんです。

（第77回・三那三文雄）

僕が想定していたのは、自分を高め、磨き続けることによって、輝くようになるということでしたが、そうではないんですよね。（光顔魏魏と）輝いているのは、如来の徳が自分の中ではたらくことによって輝くんですね

（第78回・マイケル　コンウェイ）

葬式仏教不要論を言う人がいますが、枕経、通夜、葬式、中陰、法事と続く儀式は、グリーフ・ケア・ワーク（遺族の悲しみに寄り添って歩んでいく）として大切なものであって、寺に課せられているビハーラの在り方だと思います。

（第79回・吉元信行）

犯罪を犯した少年少女たちは、親たちからいつも「ああしろ、こうしろ」と指示され、「それはだめ、これもだめ」と否定されてきたといいます。一度も「そのままでいいよ」と言われたことがないのです。非行というのは意地悪爺さんのがらくたですね。

（第80回・牧野桂一）

助かるのも傷つくのも、言葉によってです。朝、近所の中学生の子が「おはようございます」と言ってくれると、たったひと言なのに嬉しくなります。私たちは「南無阿弥陀仏」という言葉で、如来から願われている身であることを知らされ、救われるのですね。

（第81回・酒井笑子）

「死生観」というのは、死を土台にして自分の生を考えることと聞いております。… 現代は死生観のない時代。生のみを大事にし死を否定する。… 臓器移植や延命治療などは死の尊厳の意識が薄くなってきているのではないか。

（第82回・伊藤芙美子）

人間の力だけを信じていくのではなく、もっと大きな他者の力（他力）を信じ、そこから出発して、主体性を取り返すということがないと、人類は大変なことになります。生かされていることを信じる。信じればそこから自己が立ち上がります。世に処する道が開かれ、世界が開かれてくるのです。

（第83回・中本昌年）

私の人生なんなのと　親を恨み　夫を恨み　世間を恨んで幾年月　すべて如来様のお膳立てある日突然　本当に突然　如来様の光　見え聞こえ　自分の愚かさを知りました。父母の大恩知りました。仏様の御苦労知りました。子供の願い知りました。

（第84回・松田敏美）

阿弥陀さまの本願は一切の者をお浄土へ生まれさせるから、ある人は「今、浄土は満杯」と言った。しかし、浄土に生まれたならば直ちに娑婆に還って来るから、「今、浄土は空っぽ」とも言った。この往還二回向が浄土真宗のお救いです。

（第85回・渡辺暁晃）

「アンタは仏さんに成りたいんだよ」と、私以上に私を見抜く眼。その大悲心に触れる時、人生のあらゆる出来事が浄土からの道に立たしめ

る縁となり、同時に浄土へと押し出して下さるはたらきに転ぜられるのです。

（第86回・百々海　真）

高光大船は「俺は落ちるところまで落ちているからこれ以上落ちんけど、あんたら高いところ歩いてるから、アブナイ、アブナイ」と言ってます。親鸞の教えといいますのは、業人に帰る、業に帰れば自ずと如来と共にいる場に出る、ということだと思います。（第87回・水島見一）

如来の呼び声に出遇って、限りある我が人生が限りなき無量寿のいのちへ呼び戻されて生き通す。それが往生の内容なのです。死んでからの往生でなく、今、ここ、この身に往生が始まる。それを親鸞聖人は「正定聚に住す」とも「現生不退」とも言われました。

（第88回・大江憲成）

私は、お念仏申していくことで、世間のとらわれ、自分の思いのとらわれから解放されたと思います。自分のしようと思うことがスッとできる。言いたいことも言う。しかし、人間の思いは、仏さまから見たら、すべて自分を善しとするところから出ている。だから私は、「そらごと、たわごと、まことあることなし」の自分に徹していくばかりです。（第89回・岡本照子）

「合わす両手は自分の手、下げた頭は自分の頭、称えた声は自分の声」に違いないが、そこには、合わさしめずはおかないという仏のはたらきがあったのです。それを親鸞聖人は「本願力」と言われました。

（第90回・藤井邦麿）

如来は自己の前から逃げようとしている我々に向かって、「逃げなくってよい。あなたを支えている大地がある。あなたはちゃんとそこにいますよ」と本願のこころを伝え、そのことによって「自分を見捨てたり、縁あるものを見捨てないで、共に真実に生きなさい」と、こう説いてくださっていると教えられました。

（第91回・菊地　信）

今、人間を喪失した経済が闊歩している。便利さと快適さを限りなく求め続け、電気を湯水のごとく使い続けてきた結果が福島の原発事件です。それをどう考えてゆくかということと、親鸞聖人の教えを学ぶということはつながっています。私のこれまでの真宗、仏教の学びが3・11で全く根こそぎにされました。

（第92回・信楽秀道）

自分で情けないと思ってしまったり、立ちすくんでしまったりした時も、実は深く如来によって合掌礼拝され、頂かれていて、そういう如来の心に目覚めることが祈り続けられているのです。そのこと一つに気付けるかどうかが、私たちの人生が成就するかどうかの要なんだと思います。

（第93回・中山義雄）

蓮の花は汚泥の真っ只中に在りながら汚泥に染まらず美しく咲きます。苦しみや悩みのないことが人間の幸せではありません。苦しみや悩みの真っ只中にあっても、それにめげず勇気をもって起ち上がって生きていくことのできる、そういうまことの人生に目覚めた人が念仏者なのです。

（第94回・酒井正夫）

私たちが仏法を求めることは見えつ隠れつする細い白道を歩くようなことなんですね。お念仏の道を一歩一歩、歩かさせて頂いています。

（第95回・金丸フジエ）

苦悩は智慧と出会うきっかけでもあります。「弱さ」と思わされているものが、その弱さも「自分に不可分の大切なもの」と引き受けた時、実は、その人を支える強いものになるという、もっと深い生き方を切り開いてくれるのです。

（第96回・来山哲治）

もう十分贅沢なのに、まだ贅沢したいという私たちの業の深さが、すべて福島の子どもたちにかかっていると思います。私たちは持続可能な社会を子どもたちに残すために、このような残虐で罪深いエネルギーを使うことをやめ、私たちの業で起こしてしまった今回の事故から、福島の子どもたちを救う必要があります。

（第96回・武本正見）

「私はどうしてここにいるの？」という問いは、

すべての人に通じ、あらゆる人が考えなければならない問いでしょう。その問いを共有し、考え合う場と時とをもつことができるのが、「真宗のお寺」なのではないかなあと思っています。

（第97回・福島英子）

いろんな方々の歩みが私をたえず発遣、招喚してくださる。「なにも畏れるな！ 南無阿弥陀仏の道を行け！」と。「私の人生」から「本願の歴史を生きる人生」へと大きく変わる。それを親鸞聖人は「行の一念」と言うのです。

（第98回・宗 正元）

一九七五年十月、珠洲市に中部電力と関西電力の原発計画が浮上しました。児玉暁洋先生の「歴史は私達が作るのだ。私達は、歴史的社会的存在としての自己を実現しなければならない」という教えが耳にあったので、… 声をあげられない動植物や未来のいのちに代わって珠洲原発を阻止しよう、と使命感に燃えました。

（第99回・砂山信一）

仏を信ずるとか疑うとか言っている自分の心を、仏よりも何よりも確かなものとして信じているわけです。仏を信ずるに先立って自分を信じている。その自分の心そのものが転換しなければ、毒は消えないのです。その自分の心そのものを転換するはたらき、それが南無阿弥陀仏です。

（第百回・児玉暁洋）

聴聞者の感想

私はこのように聞いております

加来英司（院内・農業）

死・生について、世の中の皆さんはどのように考えているのだろうかとずーっと疑問に思っておりましたが、今回、勝福寺の百日聴聞会に出てお話をうかがいますと、講師の皆さんが生の言葉で語られる死生観が心の琴線に触れ、言葉に共鳴し、胸の奥に灯がともり、何かが育ってゆく感じがいたします。

百日聴聞会の聞き書きの表題は「如是我聞」と名づけられておりまして、今、はじめからの「如是我聞」を懐かしくめくっております。

平成二十一年一月十七日の第一回目は、円徳寺の酒井正知前住職で始まり、この年末で三十九回となりました。

その昔、吉水の草庵へいそいそと通い、法然上人の教えに聞き入った若い日の親鸞さんの胸の高鳴りが分かる気がします。

ここに勝福寺で百日聴聞会という素晴らしい集いにであえたことを感謝します。

なお後半の残講を楽しみにしております。

百日聴聞会に参加して

松本知代（大塚・会社員）

「親鸞聖人の七百五十回御遠忌に向け勝福寺で百日聴聞会を企画しますが参加できますか？」とのことで、私は「まぁ、いいか。土曜日は休みだし、忙しい時は、ごめんなさい、の一言でいいだろう」と思い、「大丈夫です」と返事しました。

今年の一月より、円徳寺の酒井前住職の、ロシアでの抑留から帰国後はじめて亡き親の思いに気づき仏法に出会ったという、お話し。鍛冶谷さんが「愚禿」を語り、原寛孝さんが祖母を思うて流す涙、等々。それぞれの講師の仏さまに対する思いを拝聴し、自分を見つめ直す機会が与えられ、今までの私は自己中心にがむしゃらに生きてきたことに気づかされました。そして、念仏申すことにより、自分の心が落ち着くことを教えられました。

住職さん達の発願で、私の回りに仏法を近づけていただき感謝しています。まだ続きますが、出来るかぎり拝聴します。反面、百日聴聞会終了後、「まだまだ聞きたいと思ったら、どうしょうかな」と心配しています。 南無阿弥陀仏

私の「如是我聞」

渡辺和義（常徳・公務員）

私にははっきり申して、まだまだ信心するこ

と念仏することの本当の意味は分かりません。しかし、聴聞会というサンガの中に身を置けば、不思議と心が安まり居心地の良さを感じます。御院家さんや坊守さんのお人柄もあるだろうし、集う方々の醸し出す雰囲気もあるのだろうと思います。しかし、衆生を分け隔てなく受け入れ、救いとってくれるという阿弥陀如来の寛き御心が作り出している雰囲気ではないかとも思うのです。腹にストンと落ちるようなドラスチックな分かり方ができなくても、サンガの持つ宗教的な雰囲気に身を置き続けることによって、皮膚から浸み込むように信心が少しずつ育ってくるような気もします。いつの日かそれがしっかりした信念になりますように今後も聴聞を続けさせていただきます。

親鸞聖人の教えには「不断煩悩得涅槃」のように一見パラドックスに思われるような教えもあり、奥深さと魅力を感じます。今後は、そういうことや「他力」についても、もっともっと聴いていきたいと思います。

南無阿弥陀仏

聞き書き担当者・感想

毎回『如是我聞』（ご法話の聞き書き）を出しましたが、そのテープ起こしを担当した者が最後に「聞き書き担当者・感想」を書きました。その一部をご紹介しておきます。

第一回 酒井正知師「帰命無量寿如来」

「如来の声が本当に聞こえているか具体的に自分を問い直せ」「この身につまされるものがなければ聞こえない」という師の厳しい言葉が印象に残りました。私は（身につまされるような）時代に生きていながら、表面的にしか見ず、聴かず、考えていないことを思い知らされました。また、師は九十歳を前にした老いの心境や、自らの来し方を懺悔話として語ってくれました。聴聞を続けることの大切さ、僧伽の大事さを語る師の言葉の中に限りない暖かさを感じました。

南無阿弥陀仏　（渡辺和義）

第十五回 陶山法水師「人間」

老いを感じるこの頃、子どもたちや周りの人々になるべく迷惑をかけずに日々の生活を送りたいと思っていた私に、「①人間は迷惑や世話をかけずには生きていけない存在である②先人は人間は愚かだということを一生涯聞き続けてきた」、二つのことを「お互いさま」の言葉は教えて下さっているようです。僧伽の場をたまわり、色々な言葉に呼びかけられながら百日聴聞会の歩みを続けます。　（佐藤麗子）

第二十回 平野善之師
「『隣る人』不在の時代を生きて」

私にとって「隣る人」なる存在が、生みの親から、結婚して主人（忠弘）にかわり、よき師との出遇いによって南無阿弥陀仏の呼び声を聞く身となりました。　（岡本照子）

第二十三回 五十嵐務師「助かる縁のなき身」

五十嵐先生のお話しされるお顔は「光顔魏魏」と輝いていました。私も、「一切皆苦」の真理に順い、苦を払いのけるのではなく、苦をそのまま頂いていける道を学んでいきたいと思います。　（香田紀子）

第二十四回 武田淳子師「願いに願われて」

先生が嫁ぐ時、お父さんから「財産はないが仏法を持ってゆけ」と願われたように、私も父亡きあと、福円寺さんから「お父さんの後を継いでお寺に参りなさい」と勧められ、父の願いを感じつつ聞法の歩みが始まりました。これからも人としての生きる道を学ばせて頂きます。　（永田睦子）

第五十一回 佐野明弘師「親鸞聖人と私」

「雑行を捨てて本願に帰す」。この言葉は、専修学院にいた時に、同じ班員の人に言われた言葉です。「いつまでも、自分を頼った生き方

で良いのか」とも言われ、「自分を中心に生きている、傲慢な私や」と、思うようなことはあっても、もう一つ深く頷けない自分がいる。薄紙一枚、薄いのかもしれないけども、自分で厚くしてしまっている紙一枚がどうしても破れていかない自分というものを、問題にしていかなければと思います。

（岡本朋之）

第八十三回　中本昌年師「信ずるは力なり」

如来さまから信じられるということがあって如来さまを信じるということが起こってくる、というところに感銘しました。

こちらから一方的に信じるのではなく、何かそこにお念仏との出会いがあるのかなと思われてきて、信じられているという感覚が大きな力となって働いている世界があるように思われました。

（中山美津子）

ご法話の後の質疑で、「五十嵐さんはお念仏いただいても愚痴が多いですね」と、横川久美代さんから質問を受けているところ。

満講の集い

三年かけた百日聴聞会も聖人の御遠忌をもって満了いたしました。そこで翌年の一月九日「満講の集い」を開き、「私は百日聴聞会で何を聞かせていただいたか」確かめ合いました。その時、話された感話の一部をここに掲載させて頂きます。

法話にひどく感動し涙ぐんだ日、よく聞き取れずはがゆい思いをした日、十分理解できず隔靴掻痒（かっかそうよう）の感を覚えた日など、三年近くの月日を重ねて、私自身、中身（心の相）はどのように変わったのだろうか。

何度も何度も心洗われる法話を拝聴していながら「信心決定」や「回心」が遥かな夢のように思われるのは…。煩悩具足、煩悩熾盛（しじょう）の身を思い知らされるばかりです。

（池田　厚）

沢山の先生方のお話を聴かせて頂く中で感じたことは、私という人間は、如来様のおかげで生かされているのだということです。如来様のお働きの中で、自分の力などない無力な私、そのことに気付きもしないで私は駄目な人間ですといたずらに自分をいじめて、私は自分をいじめているようで実は如来様をいじめていたのです。

たとえ何の取り柄もない自分でも、自分の命を自分の所有物としないで、如来様の命として拝んでいけたらと思います。

又、愚になることの大切さも感じました。愚になるとは、称える身とならせて頂くことであり、その道しか人間の幸福はないのだということを、改めて教えていただきました。

今の私の課題は、仏法が力となることです。私は少し苦しい事や心配なことがあると、死んでしまった方がいいとか思う弱い生き方しか出来ていません。もっともっと生命力あふれる自分になることが夢です。

（植山さよ子）

私は純子さんとの出遇いで、私の生き方が一転しました。それから私の聴聞が始まりました。「百日聴聞会」であらためて「遇い難き人」に出会ったことを、深く深く教えていただきました。

私はこれから、どのように生きていったらいいのか、生き方というか、私を生かしてくれる命に帰れという、教えをずっと聴かせて頂き、諸仏称名に応答する生き方は、師との出会いであり、友を賜ったことであり、この世に生を受けさせてくれた生き方は、教えなくしては始まらなかったと思います。頂いた命は自分だけでなく共に生きていきたいという生き方を、どのようにやれるのか、したいのか、そのことの

ために、これから聴聞させていただきたいと思います。

（岡本照子）

一九四五年（昭和二十年）終戦前後、長崎教務所長でありましたかせざわほぶん先生は、長崎の末寺の寺々に出られて布教されました。熱烈な御法話の後には必ず「六字の親様」のお歌を参詣の人に教えて歌わされた事は、まだ十代半ばであった私にも、意味は分からずともその歌を覚えて歌ったのでした。年を重ねて今、教えに遇わせて頂いてみれば、なんと素晴らしい「六字の親様」であろうかと、先生のご恩が感じられるのであります。

中津市三光の長仁寺様から頂く寺報に「お念仏は生きている」と書いてあります。六〇年前、かせざわほぶん先生は高座にて、「南無阿弥陀仏は生き仏」と盛んに叫ばれた声が聞こえる様であります。

最近消えてゆきそうでありました「六字の親様」は、今、勝福寺様で新しく芽生えて下さった様であります。私は糸島の老人ホームの一室にいて、純子坊守様の歌声を聴かせて頂いています。

（金丸フジエ）

「お前はお前で丁度よい」という言葉を聞くと、我を張って生きてきた私には、なかなかそうは思えず、「丁度悪い」と思ってしまいます。繰り返し、繰り返し教えを聞いていくうちに、本当の意味で人のお話を聞く事で、少し自分が見えてきたような気がします。五十嵐さんが、命終える時まで与えられた苦を味あわせて頂く気持ちにやっとなったと、おっしゃっていたのを聞いて感動しました。

（加来周子）

宗先生のおことばに「弥陀の誓願とは、迷ったり悩んだりして来た人々の中から湧いて出てきた願であった」と仰せられたことに深く頷けることでございます。「大悲は人間の抱えている悩みや苦しみと一つになって責任を負うていく」とのおことばにも深く頷け頭が下がります。

現し身にはこれからますます「老い」が深まって行くことでしょう。体の不如意、思考力の減退、物忘れ、家族のお荷物になるのではないか等不安もありますが、老いて初めて人生が少し分かるような気がしています。どこかで少し楽しいのです。老いの不如意と一体となって下さる大悲と共に歩まして頂けることの軽やかさを感じております。

（小若女弘子）

いつ死ぬか分からないこの身を貫いて、永遠の命が私を離さない。貫いて生かしめている。日頃は「私の命を私は生きている」、そういう我執の塊なのです。そうではなかったのです。永遠の命がいま私を貫いています。それが浄土真宗の真実。「今 いのちが あなたを生きている」、これが現代の言葉の表白でありますね。こういう新鮮な言葉にふれますと、ぐっと来て「ああ、そうなのだ」と、こういう想いを新鮮にいたします。私はこの一言に今日この場で出会ったことだけでも、本当に九十歳まで生きて良かったと思います。

（酒井正知）

百日聴聞会が終わったのは、寂しく思います。でも終わりではありません、まだまだこれからも聞き続けていきます。「聞き続けていく」、これは自分の意志ではないのではないか…。お礼というお礼がまだまだ言えない自分です、と知らされているところです。お礼が言えるのはいつになるかわかりません。生まれてよかったと思えるようにならないと、皆様にはお礼が言えません。

（末松匡憲）

百日聴聞会にお参りして感じたことは、私の生き様というか、私の煩悩、業と言いましょうか、先生方は、それを肯定しているように思えました。

間違っている聴き方かもしれませんが、「業の肯定をしなさい」という事を聞きました。

（中野敏男）

仏様のお話は、嬉しい、楽しい、有難いもので、その日にお聴きした御法話は、忘れないうちに知人を見つけては話を聞いてもらいます。私が感激しているものですから、早く誰かに伝えたくて…。

ところが、運が良いのか、悪いのか、聴いたことを忘れるので、やはり何度も何度もお寺参りをする以外に仏様のお話を身につける方法はないと思い、有難く耳を傾けることができます。

（浜永章子）

「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待受け百日聴聞会」

回数	年月日	講　師	住所	所属等	講　題
1	2009年1月17日	酒井 正知	宇佐市	圓徳寺前住職(本願寺派)	帰命無量寿如来
2	1月31日	武内 和朋	日田市	長福寺住職	今、いのちがあなたを生きている
3	2月7日	鍛冶谷 榮	日田市	指物大工	愚禿の心を問う
4	2月14日	藤谷 知道	宇佐市	勝福寺住職	悲しき哉、愚禿鸞
5	2月28日	原 寛孝	別府市	旅館館主	極重悪人
6	3月7日	前田 伊佐人	大阪府	大谷専修学院卒業生	有縁の知識
7	3月14日	松岡 フミ	宗像市	元高校教師(90歳)	ながい間のお育てありがたく
8	3月21日	横川 香正	佐伯市	善正寺住職	和国の教主―聖徳太子と親鸞聖人―
9	3月28日	後藤 正純	宇佐市	善福寺住職	報恩の人生
10	4月18日	津垣 慶哉	田川市	正応寺住職	真宗の日暮らし
11	4月25日	長野 淳雄	山国町	明円寺住職	宗祖に遇う
12	5月2日	小若女 弘子	宇佐市	主婦	片思い
13	5月9日	藤枝 宏寿	福井県	了慶寺住職(出雲路派)	不思議について
14	5月16日	佐藤 修水	宇佐市	光蓮寺住職(本願寺派)	私の願い、仏の願い
15	5月23日	陶山 法水	臼杵市	万春寺住職	人間
16	5月30日	渋谷 円	山国町	珀明寺住職	まこと
17	6月6日	宮岳 文隆	由布市	心光寺住職	念仏一つ
18	6月13日	小袋 雅文	豊前市	西教寺住職	親鸞は悪人だったのか？
19	6月20日	御堂 成司	宇佐市	正専寺住職	ご縁のままを生きる
20	6月27日	平野 喜之	石川県	「井上嘉浩さんを死刑から守る会」事務局	「隣る人」不在の時代を生きて
21	7月4日	市江 康生	豊前市	製茶業	マンマンさんて　なあに？
22	7月11日	加来 知之	みやこ町	浄邦寺衆徒	そのままのおたすけ
23	7月18日	五十嵐 務	別府市	前四日市別院法務員	助かる縁のなき身
24	7月25日	武田 淳子	行橋市	歴応寺前坊守	願いに願われて
25	8月1日	村上 秀麿	福岡県	光明寺住職	「聞く」ということ
26	8月8日	藤谷 純子	宇佐市	勝福寺坊守	世のなか安穏なれ　仏法ひろまれ
27	8月22日	溪内 弘惠	石川県	大谷専修学院青草人の会長	我ら、浄土の住人
28	9月5日	等岳 文英	杵築市	玄昌寺衆徒	一人の出発
29	9月12日	谷 栄子	長崎県	無職　(88歳)	真実と煩悩熾盛のみ教え
30	9月26日	江本 忍	三光村	長仁寺住職	尊い一声、尊い人生
31	10月10日	高岡 願生	長崎県	帰命寺住職	如来より賜りたる信心
32	10月17日	武本 正純	宇佐市	西賢寺住職	死との出会い
33	10月24日	日野 詢城	由布市	見成寺住職	「学ぶ」ということ

34	10月31日	高藤 英利	九重町	寶光寺住職	帰り道
35	11月7日	村上 匡一	みやこ町	念信寺住職	親鸞聖人と「いなかのひとびと」
36	11月14日	土井 紀明	兵庫県	念仏寺住職	本願の念仏
37	11月28日	尼子 芳壽	宇佐市	蓮照寺住職(本願寺派)	『教行信証』の総序に学ぶ
38	12月5日	小栗栖 法秀	大分市	妙正寺住職	譬喩経から
39	12月19日	加来 佳子	豊前市	満光寺坊守	自然法爾
40	2010年1月9日	堤 日出雄	宗像市	元学校教師	『歎異抄』の中の念仏
41	1月16日	太田 信昭	みやこ町	龍王寺住職	白色白光 微妙香潔
42	1月30日	寺田 正知	福岡県	芳永寺住職	信外の軽毛 －世間と仏教－
43	2月6日	藤谷 知道	宇佐市	勝福寺住職	浄土真宗は仏教なり
44	2月13日	井上 隆範	本耶馬渓町	明照寺住職(本願寺派)	念仏申す
45	2月20日	渡辺 愛子	滋賀県	仏典童話作家	お念仏に出会うまで
46	3月6日	宮下 晴輝	京都市	大谷大学教授	現に苦あり
47	3月13日	高雲 昌美	新潟県	寶國寺住職	この身軽からず
48	3月20日	池田 朋行	宇佐市	日豊教区駐在教導	懐かしき悲歎と共に
49	4月3日	宮森 忠利	石川県	北陸大谷高校副校長	若者と共に生きることを学ぶ
50	4月17日	西藤 眞	大分市	西福寺住職	無量寿「不可思議なるもの」
51	4月24日	佐野 明弘	石川県	光闡坊住職	親鸞聖人と私
52	5月1日	横川 久美代	佐伯市	善正寺坊守	助かるって、どういうこと?
53	5月8日	田畑 正久	宇佐市	医者	往生浄土するものはなにか
54	5月22日	平田 崇英	宇佐市	教覚寺住職(本願寺派)	願いに聞く
55	5月29日	江林 智靜	大分市	願西寺住職	真宗と酒
56	6月5日	張 偉	愛知県	同朋大学准教授	海をこえて響くお念仏
57	6月12日	鳥越 正道	熊本県	光寂寺住職	退一歩の信
58	6月19日	寺本 温	長崎県	真蓮寺住職	業縁存在なる人間
59	7月3日	野呂 昶	滋賀県	詩人	日本の昔話
60	7月10日	村上 大純	みやこ町	通善寺住職	弥陀の本願まことにおわしまさば
61	7月17日	川島 弘之	茨城県	元高校長・大谷専修学院生	存在の満足－生きているだけでありがたい－
62	7月24日	伊藤 元	北九州市	徳蓮寺前住職	真宗の宗風
63	7月30日	鍵主 良敬	京都市	大谷大学名誉教授	如来大悲の恩徳
64	8月7日	日野 敦子	由布市	見成寺坊守	兵戈無用
65	8月21日	孤野 秀存	京都市	大谷専修学院長	信の道を行く人
66	9月4日	東岡 繁	兵庫県	西源寺住職	聞法の歩み
67	9月11日	加来 雄之	京都市	大谷大学教授(真宗学)	悲願

68	9月25日	酒井 信也	宇佐市	円徳寺住職（本願寺派）	帰依三宝～今ここをともに生きる～
69	10月9日	東 守蔵	石川県	元学校教師	父母先祖から頂いた仏縁
70	10月16日	佐々木 淳二	大分市	大分メノナイト・キリスト教会	私と親鸞
71	10月23日	福島 和人	滋賀県	大谷専修学院講師	真宗の教えと環境
72	11月6日	石塚 朋子	広島県	無職	自然に生きるなら
73	11月13日	青柳 田鶴子	大阪市	速成寺坊守	わが力たのむ愚かさ
74	12月4日	渡辺 顕信	滋賀県	元大谷大学図書館勤務	ブッダと宗祖のまなざし
75	12月18日	田口 弘	東京都	「坊主バー」経営	念仏者のお仕事
76	2011年1月15日	池田 理	兵庫県	光照寺住職	本当の自立
77	2月12日	三那三 文雄	杵築市	浄願寺保育園長	真宗の保育ーある出来事から問われたこと―
78	2月19日	マイケル・コンウェイ	京都市	大谷大学助教	親鸞聖人の教えに出遇った私
79	3月5日	吉元 信行	中津市	大谷大学名誉教授・大日寺住職	共に歩み、共に泣くー仏教福祉との出会いー
80	3月12日	牧野 桂一	大分市	筑紫女学園大学文学部教授	子らのいのちに照らされて
81	3月26日	酒井 笑子	愛知県	「清澤満之記念館」非常勤勤務	如来よりたまわりしもの
82	4月16日	伊藤 芙美子	北九州市	徳蓮寺前坊守	念仏は生きる力
83	4月23日	中本 昌年	富山県	富山大学名誉教授(哲学)	信ずるは力なり
84	5月14日	松田 敏美	愛媛県	漁業	もしよきひとにあわざれば
85	5月21日	渡邊 暁晃	宇佐市	西楽寺住職(本願寺派)	仏法とは何か
86	5月28日	百々海 真	東京都	了善寺住職	仏の教えは家に在り
87	6月18日	水島 見一	京都府	大谷大学教授	夜明け前は闇に決まっている
88	6月25日	大江 憲成	中津市	九州大谷短期大学長	往生浄土について
89	7月2日	岡本 照子	宇佐市	農業	よき師よき友に育まれながら
90	7月9日	藤井 邦麿	日出町	正善寺	縁を慶ぶ
91	7月23日	菊地　信	京都市	大谷専修学院主事	大谷専修学院に学んで
92	7月30日	信楽 秀道	宮城県	願勝寺住職	3.11後に考えたこと－地震・津波そして原発－
93	8月6日	中山 義雄	京都府	大谷専修学院指導補	法蔵精神の学（まね）び
94	8月27日	酒井 正夫	三重県	道浄寺前住職	獲信－人生の課題は信をたまわること－
95	9月3日	金丸 フジエ	福岡県	妙楽寺前坊守	人身受け難し
96	9月10日	来山 哲治	行橋市	浄喜寺住職	被差別の子や親から知らされて
	（同上）	武本 正見	宇佐市	西賢寺衆徒	放射能といのち
97	9月22日	福島 映子	石川県	本教寺坊守	私は、どうして〈ここ〉にいるの？
98	11月5日	宗　正元	東京都	元東京大谷専修学院長	真宗遇いがたし
99	11月12日	砂山 信一	石川県	元中学教諭	なぜ仏法を求めるのか
100	11月26日	児玉 暁洋	京都市	元教学研究所所長	南無阿弥陀仏と言う信心 －第十八願に乗托して第一願に生きる－

真宗本廟奉仕団 並 親鸞聖人聖蹟巡拝

私たちが京都からお寺に帰って来て始めたことの一つに、「真宗本廟奉仕団」を組んで本山にお参りすることがありました。

「真宗本廟奉仕団」の良いところは、二泊三日のゆったりした日程で、先生方のご法話を聞き、ご本山の建物に触れ、全国津々浦々から参詣された同行さんと交流できることです。

また、上山に合わせて、親鸞聖人ゆかりの地を、一泊二日の日程で石黒明信先生にご案内して頂きました。

この奉仕団は昭和六十三年から平成五年まで五回続けて行っています。その記録が「響流」に残っていますので以下に収録しておきます。

その後、平成十九年に「かはづの会」が「真宗本廟奉仕団」を組んでご本山参りをしました。この時の記録は「かはづの会」のところで見て下さい。

そしてこのたび（令和元年）、響流山勝福寺の御遠忌記念事業として「真宗本廟奉仕団」を組み本山参りをしてきました。その記録を最後に収録しておきます。

本廟奉仕と聖蹟巡拝の内容

① **本山での奉仕研修**（一日～三日）

○仏法聴聞
○座談会
○お朝事
○お内仏のおかざりの勉強
○お勤めのけいこ
○本山の諸殿拝観
○清掃奉仕など

② **親鸞聖人の聖跡巡拝**（三日目～四日目）

○法界寺（誕生の地）
○青蓮院（得度の地）
○延暦寺根本中堂・西塔・横川（修学の地）
○六角堂（夢告の地）
○安養寺（法然人との出会いの地）
○崇泰院（御廟所跡）

2泊3日　基本日程

※この日程は基本です。入館されて最初に、引率責任者・教導・補導を中心に打ち合わせを行い、最終的に決定いたします。

	1日目	2日目	3日目
6:00		起床・洗面 館内清掃	
7:00		晨朝参拝 （帰敬式） 朝食	
9:00	※和敬堂へは、11時までにお入りください。	（法名伝達式）	講義
10:00		お内仏 ～御本尊を中心に～	座談 （協議会）
10:30	入館		
11:00		座談	
11:20	結成式		解散式
12:00	昼食	昼食	昼食
13:00	日程打合せ 両堂参拝	（記念写真撮影） 清掃奉仕 諸殿拝観	退館
	オリエンテーション		
15:00			
16:00	講義	講義	
17:00			
17:30	夕事勤行（感話） 夕食	夕事勤行（感話） 夕食	
19:00	座談	座談	
20:30	入浴 就寝		
22:00			

第一回 真宗本廟奉仕団

昭和63年（1988）11月2日～5日　9名参加

渡辺 信雄　（上町　77才）

上山奉仕でなければ出来ない突っ込んだ聞法の機会を与えられて、本当に有難いことであった。おぼろげながらも、今度の御縁を通じて、今後の聞法姿勢がいよいよ明らかになったような気がする。

まったくの思いばかりの世界から、事実あるがままの涅槃真実の世界へと、謙虚で素直な心で真剣に求めていかねばならぬと強く感じた。

しかし、これは容易ではないと思う。相変わらず強い葛藤の日常が続くことと思う。しかし短い余生にむかって、毎日の日常生活の事実に当面しながら、常に仏様の光を仰ぎながら求め続けて、真の人生の喜びに到着したいと思う。

おぼろげながらも、何か嬉しい一歩を歩み出させて頂いたようで、有難い御縁だったと感謝しております。

外園　章　（常徳　77才）

勝福寺のお勤まりには、欠かさずお参りし、御法話をお聞きしてきましたが、今回の上山で、教導先生・補導先生のご教導によって、今まで判然としなかった、お内仏を拝むときの思いが少しはっきりしてきました。それは、「私そのものは何だろう」ということより掘り下げ、これでもこれでもというような突き詰めた教導で、「私が目覚めさせていただくためにおまいりする」ということを知らされ、有難く思いました。

今後も聞法を続け、弥陀の本願に少しずつでも目覚めさせて頂く決意でおります。

渡辺マツ子　（中津　55才）

今回、義姉の納骨をかねて上山奉仕に参りました。家の阿弥陀様も本山の阿弥陀様も、大きさの違いはありましたが、変わりなく私達を迎えて下さいました。

納骨をして、これで役目が終ったと思い、自分で自分のしたことに、良いことをしたんだと、数時間前まで思っていました。

でも、先生方のお話を聞き、自分の都合の良いごうまんさ、おごりに気がつきました。阿弥陀様は、仏になった義姉を介して、私をここまで導き、「目覚めよ、目覚めよ」と御教えられたようです。

「方便法身、ありのままの形・姿、光に照らし出された世界」……なんと今までの暮らしが自分と自分本位であり、健康であるのも自分自身が作っていると思ってました。

これから先は、何か人にしてあげられるような生活を送らせていただきます。ありがとうございました。

若林 松枝　（柳ヶ浦　66才）

八年前、亡夫の納骨に長男と上山いたしました時、下山のおり長男から、折あれば今一度、上山いたしますようにと言われました。

このたび思いがけず上山できましたことを、本当に嬉しく思います。

はじめて奉仕団に参加いたしましたこと、そのことだけでも意義がありました。様々な奉仕研修の諸行事も、本当によかったとしみじみ思いました。

筆には表わせない心の糧を得て、豊かな心、たおやかな面ざしを土産に帰宅いたしたく思います。

（「響流」4号）

ご本山で書かれた感想文です。誌面の都合上、一部だけ抜粋して掲載しております。

第二回 真宗本廟奉仕団

昭和64年（1989）5月16日～19日 9名参加

渡辺 文生（上町・83才）

私は、行く先短い老齢のため、人生最後の上山と思い、参りました。このたび仏さまのまえで仔細に説明して頂き、ようやく親鸞聖人の御遺徳を深く覚えました。

また、自分の家のお内仏の取り扱い、飾りつけなどが知られたようです。これを家内一同に周知させ、子供、孫までそろって、お内仏のまえで念仏の声を上げたいと思っております。

森 隆雄（上町・78才）

昔、親鸞聖人の本や『般若心経』など仏典関係の本を読んだことがあり、いくぶん覚えているつもりでしたが、老齢のせいか忘れてしまっておりました。今度帰ったら再度、読み返したいと思います。

これからの生活において、親鸞聖人の高い理想が大いに励みになることを念じております。

小川 春海（山本・66才）

東本願寺に来まして、一番私の目に付き驚いたのは、建物の大きなことでした。

また、先生の法話を聞いて本当に勉強になりました。お内仏のお飾りの仕方など、これまでずいぶん間違っていたことがよく分かりました。

小川 アキ子（山本・63才）

幼くして死んだ子供の二十五年もすみ、ご本山に参らせていただきました。

先生に色々と仏さんのことをお聞きして、何もかも違っているのに、恥ずかしく思っております。帰ったならば必ず実行したいと思います。

瀬々 次子（西本町・66才）

皆々様のおかげで、本山にお参りができ、建物の大きいことに第一びっくり致しました。

仏法については一年生にて、先生方のお話がよく聞き取れず、二日目になって少しは分かってきましたが、帰ってからもっと勉強いたすつもりです。

落合 ヤス子（小菊町・65才）

奉仕団では清掃などだけと思っていましたので、あまり書くことができませんが、三日間の同朋生活で、少しは弥陀の本願が開かれれば良いが、と思っています。

渡辺 昭一（上町・62才）

今回の上山では、同朋会館での晨朝参拝、法話、研修講義、お夕事勤行等すべてが大変勉強になりました。特に龍池教導師・志武補導師より懇切なる浄土真宗についてのお話を聞かせていただき、南無阿弥陀仏の有り難さがだいぶ分かるような気がしてきました。これをご縁に『教行信証』『歎異抄』を読ませていただき信心を深めていきたいと思います。

同朋会館で三日間学びえたことを、これからの生活にも活かして、み仏の教えでこれからの余生を有意義に生かされていく覚悟です。

河野 スエ子（院内町副・61才）

定年退職を機に少しはお寺参りをしようと思い、勧められるままに奉仕団に参加させていただきました。

何分にも無知なため、講師の先生方のお話にびっくりするばかりです。でも、熱心なご指導のおかげで、二日間のあいだに、いくらかお念仏の有り難さや、お内仏の尊さや、作法等を教えていただき、仏さまに近づいたような感じさえします。

（「響流」10号）

第三回　真宗本廟奉仕団

平成2年（1990）4月14日～16日　8名参加

大久保 清己　（中津　74才）

74才の今日、過去を振り返ってみると、自分の身を守ることで精一杯でした。それが段々と年をとるにつれ、家族のことや周りのことを考えるようになりました。今では、先祖のこと、地域社会のこと、国のこと、宗教のこと、これらの恩を深く感ずるようになり、これらの恩に報いることを心がけるようになりました。

今度の上山に際しては、お寺様の奨めがあり、夫婦一緒に参った次第であります。そして皆さん同朋と共々、起居を一緒にしながらお説教を聞いたりするうち、生と死、仏の問題、供養のこと等多くを知ることができました。これからは報恩を念じ、人の道をはずれないよう、こまめなうちにも毎日を楽しく過ごすことだと思いました。

矢野　矢（すなお）　（西本町　73才）

今回、勝福寺さんのお蔭様で上山奉仕団で参加することができたことを心から嬉んでいる一人です。また内藤・上原両先生のお話で、お内仏を飾るお話をお聞き致して、自分達が今日迄のことは水に流して、新しいお飾りを実行致したいと思います。

外園 エイ子　（本町　57才）

仏様と私が出会うということが念仏であると申される、仏様の命の中に生かされているのだと、私もそうであろうと少しわかりかけております。　生かされていることのよろこびを、今までも、又今からも、子孫をいつくしみ育てることでよろこびをいただき、周囲を大事にして生かされていこうと思います。

幡手 スエノ　（新町　66才）

先生のお話はとても難しかったけど、良かったと思いました。

毎日のお食事はとてもおいしくバランスのよいのにびっくり致しました。ともすれば偏りがちな家の食事に気をつけなければと思いました。

とても楽しい旅でした。できればもっとお説教を聞きたいと思いました。自分達が子供の頃、聞いた懐かしい説教を…。

中野 智恵子　（高家　57才）

お誘いを受けた時は、私は本願寺派のため迷いましたが、南無阿弥陀仏には西も東もないと、また明日のいのちも分からない身であれば、と思いたちました。

夕時勤行、御影堂での百五十人程にも及ぶ人のお勤めの声が、荘厳さの中に地の底から突き上げてくるような力強さ、ひびきを感じました。

御影堂前清掃については、疲れた感じの中で、何かしら心の落ち着きを覚えました。廊下の掃除をしたというより、自分自身の掃除をさせていただいたのではないかと思います。

大久保 マサ子　（中津　69才）

仏教のことは何にもわからず、いつか一度は本山にお参りさせていただきたいと思っていました。着いてみて全国各地より研修に見えられているのに驚きました。皆様熱心な信者さんばかりで本当に見習うことばかりです。

御影堂、阿弥陀仏堂の建物の大きさにびっくり致しました。ありがたいお話も沢山聴きましたが、恩徳讃だけ一つ覚えました。

蔵本 マサ子　（上町　68才）

真宗本廟奉仕団として、本当に奥ゆかしき本願寺を参拝させていただき、誠に有り難うございました。色々とお話しをお聞き致し、反省致し有り難く思っております。有り難うございました。

（「響流」18号）

第四回　真宗本廟奉仕団

平成4年（1992）5月9日～11日　10名参加

晴れ晴れと　安部 マチ子（山本 60才）

私は今回、上山をして、嬉しくてなにか心が晴れ晴れとした思いになりましたが、主人は親鸞聖人さんの前に座った時、涙が出て仕方なかったと言っていました。しかし、私はなぜでしょうか・・・？　これから聞法していくうちに、自分から涙が出てくるのか知らんと思いました。

素直な気持で　山本 真月（山本 78才）

先生方のお話しを色々と聞かせて頂き、先祖の選んだ真宗の教えを素直な気持で勉強して行こうと思いました。四時半からの夕事勤行で、大勢であげた正信偈の素晴らしかったこと、感激いたしました。

初めての仏縁　川面 専子（山本 70才）

今度が初めての上山でした。まだ南無阿弥陀仏ということすら、何のことやら分かりません。

これから色々とお話しを聞いて、私のこれからの行く道はどのようにして進んでいったら良いのか、考えていきたいと思います。

念仏申す母　落合 ヤスコ（小菊町 68才）

今度の上山は二度目です。一回目の時は、ただお参りしたという感じでしたが、今度はだいぶ自分が変わったような感じがします。

若くして（42才）病にたおれた自分の母を一度はご本山にお参りさせてあげたかったと、これまで思ってきたのが、今は、聖人のおそばで念仏申していることと思えてきました。

亡き父のお念仏　渡辺 シゲ子（常徳 68才）

今までは空念仏でした。自分勝手で思い通りにならぬと、年がいもなくすぐ動作に出てたこと、本当に恥ずかしいことです。毎朝の形ばかりのお念仏も、勝手な事ばっかりでした。

亡き父が生前、朝から夕までお念仏申していた気持が、少しは分かったような気がします。

真宗門徒になる　松本 貞則（日出町 62才）

帰敬式を受け、身の引きしまる思いがしました。私は今日より釈住諦として、真宗門徒の一人として、愚者となり、ただ念仏をとなえ仏の道に近づきたいと思います。

我家にお内仏を　松本 サカエ（日出町 62才）

落合のお姉さんのすすめで、真宗本廟奉仕団の参拝に来て、本当に良かったと思いました。講義と話し合いを通して、早く仏壇を買って、ご本尊をお迎えし、朝夕、毎日お参りしようと思いました。

法名を頂いて　秋月 輝美（新町 62才）

京都駅から清めの雨にぬれ東本願寺の門をくぐりました。「おこぞり」を受け、法名を頂き、身も心もシャンとなり、以前のぼんやりした私からほんの少し脱皮したようです。明日からは又違った人生の道を歩かねばと、心あらたにいたしました。

有意義な毎日　渡辺 恒子（新町 62才）

若御院家さんからお誘いを受け、なんとなくお参りをしたいなと思い連れてきて頂きました。

今日で二日目、朝夕のお参りをし、先生方の講義を聞き、清掃奉仕をするなど、うまく言えませんけども本当に有意義な毎日でした。

法名を頂く　加来 雪子（大分市 70才）

帰敬式のとき、親鸞聖人の御影の前で、髪にカミソリを当てて頂く瞬間、身の締まる思いがしました。釈尼浄湧と法名を頂き、自分なりに誠に良い名前と、ホクホクする気持です。

如来様を拝し、私も仏弟子に数えてもらえると思う心で、残る人生を少しでも仏心に近づくように致します。感激ひとしおでございます。

（「響流」29号）

第五回　真宗本廟奉仕団

平成5年（1993）5月15日～17日9名参加

聞法のおかげで　幡手 千里（矢部　71才）

五月十五日、勝福寺さんのお導きでご本山にお参りできました。これもみな、親鸞聖人のみ教えを聞法させてもらった大きな力のおかげと、只々感謝で一杯です。

七十歳をこえてこのご縁にあうことができ、今は、ご本山の偉大さに頭が下がるばかりです。

私のこれから進む道　石川 マツヨ（院内69才）

今回、奉仕団に参加して、竹園教導先生の法話をお聴きして、私の今からの生活の進む道が明らかになりつつあります。

真宗の教えに近づくよう、朝夕のお参りに南無阿弥陀仏を申し、法話をお聴きする機会があればできるだけ出席するつもりです。

人生を語りあう　外園 ミツヱ（常徳　69才）

かねがね本山にお参りしたいと思っていたところ、亡夫の須弥壇収骨をかねて、勝福寺さんのお世話でお参りの機会を得て大変うれしく思いました。

研修会では教導先生の親切なお話や同朋の方々のありのままの意見発表に耳を傾けました。色んな生活のありようや、毎日をひたすらに生き抜いてこられた様子をお聴かせ頂きました。これから先、人生を共々に語りあい、聞法して参りたいと思います。

「まことのみむねいただかん」　山本 裕敬（山本　67才）

これまでお寺の世話をさせて頂くだけで、あまり聞法しておりません。それなのに、先生方の講話を拝聴してはすぐ頭で理解しようとし、つい「わからない、わからない」と言ってしまいます。この身で受けとめねば駄目なのだと思いながら、どうしても頭で分かろうとすることから抜け切れない私ですが、真宗宗歌にありますように「ひたすら道を聞きひらきまことのみむねいただかん」このお言葉にそえるよう努力します。

心あらたに　山本 ヒロ子（山本　66才）

教導、補導の先生のゆきとどいた講義には頭が下がりました。また「おこぞり」を受け真宗門徒としての自覚を新たにさせられました。

幸いに善き師、善き友に出会うことができ、聞法する機会を得ておりますが、仏法を生活の中に生かしてこそ本当の聞法であると思うとき、一生聞き続けてゆかねばと、強くそのことを感じさせられました。

尊い体験　石川 陽一（院内　65才）

はじめての上山で、施設の雄大さ、荘厳さに驚きました。また、両堂（阿弥陀堂、御影堂）の参拝、仏道についての講話、そして計画された研修や奉仕は、現在までの己の人生のなかで尊い体験の思いでとして、決して忘れることができないと思う。

これを機会に、反省のうえに立って真宗について学び、聞き開くように心がけたい。

御仏様　石川 綾子（院内　64才）

この世に生を受けて六十余年、はじめて本山参りを致しました。只々、驚きの一声でした。

おそるおそる御仏様を見上げると、最初はこわいお方に見られているようで顔が上げられなかったけど、帰敬式の席順が御仏様の真正面で、やっぱり御仏様にお心を掛けて頂いていた事の確信を得て帰ることができるのが最大の喜びです。有難うございました。

（「響流」34号）

勝福寺御遠忌記念
真宗本廟奉仕団

令和元年（二〇一九）五月七日～十日
十九名参加

上城 佳代　（山香　77才）

日頃、勤行しながら雑念ばかりが頭をよぎって、こんなことでよいのかと悩んでいました。また、過去のことは戻らないと思いながら、愚かな煩悩ばかりの日々を過ごしておりましたが、少し心が軽くなりました。

香田 紀子　（大塚　78才）

よう来た、よう来た
ようやく行きづまったか？
それはよかったな！

と、親鸞さまのお声を聞きました。このたびの御遠忌奉仕団に参加できましたこと、本当に嬉しく思います。

小林　聖　（院内　74才）

朝の晨朝参拝や夕事勤行などを経験でき、自分で出来ることから始めたいと思います。

御影道中に参加し綱を引くことを体験でき、八日間に及ぶ御影道中がいかに苦難の連続だったか、想像できました。

佐藤 麗子　（四日市　70才）

以前、聞いた「親鸞聖人は七五〇年も私たちを待っていて下さった。勿体ないことだ」という同行の言葉がよみがえってきました。御影道中に参加し、お輿を引くことができ、また、沿道のお店から出てきて合掌される尊いお姿に出遇え、感動しました。

陶山 光麿　（臼杵市　78才）

五年ぶりの東本願寺でしたが、素屋根も取り外され両堂の素晴らしさに見とれました。また御影堂の正式名称が「浄土真宗本廟本願寺開山影堂」であり、阿弥陀堂が「本願寺無量寿仏宝殿」であることを初めて知りました。

高橋 直子　（中原　74才）

親鸞聖人の御旧跡を、「自分がその時代に生きていたら、どうだっただろう」と思いながら巡りました。御影道中は信心なくしては受け継がれるものではありません。これからも皆さんの輪の中に入り聞法していきます。

中園 尚武　（四日市　76才）

前回の推進員研修では研修、研修で過ごしたが、今回は本山の奥まで拝観でき、山門の清掃、御影道中の参加と、多くの行事に恵まれ大変よかった。もっと親密な話ができると思うので最後の夜はお酒を解禁して欲しい。

林　貴子　（別府　69才）

同朋会館の廊下に「私は正しい。争いの根はここにある」とあったが、「私は正しい」を疑うことなく生きています。お互いに「正しい」にとらわれずに生きていけるようになれば、いいなぁ。常に思い返し思い返しし、少しずつ歩んでいこう。

本多 加代子（豊後高田　72才）

御影道中は短い距離の参加でしたが、蓮如上人への熱い思いを共感できました。「なぜ、お念仏？」と問うことを忘れずに聞法していくことで、また人と出会うことで、お念仏に込められている願いをくみ取っていけるのではないかと思います。

松尾 由美子　（常徳　71才）

遠い昔のことながら今日まで念仏が伝えられたことがすばらしく、私たちがそのことで生かされているんだなと思います。両堂参拝から諸殿拝観、清掃奉仕と日常経験できないことばかりで、有り難いことでした。

向野 順子　（院内　80才）

蓮如上人御影道中に五条通りからお供させていただき、お輿の綱を引きながら「蓮如上人さまのお通り」と思い切り声をあげさせて頂きましたこと、有り難く有り難く感謝にたえません。

向野　茂　（院内　84才）

今回の上山の日程は、勝福寺門徒の二名が御影道中に参加しているので、彼らをご本山でお迎えしようと決めました。御影道中の「御帰山式」で道中でのご苦労を感じ、涙が出ました。また、毛綱の実話に感動を覚えました。

外園 エイ子（四日市 86才）

四日市別院の中にいるような気がして、楽しく過ごすことができました。

吉武 康子（中原 76才）

都会の真ん中にありながら、なんと静かな、きれいな空間かと…、そこに身を置かせて頂ける喜びをかみしめています。朝、お仏飯をお供えする時、父母に話しかけるだけでしたが、「阿弥陀さまのお顔を見てお参りしていますか」と問いかけられたことを宿題にして帰ります。

若林 範子（柳ヶ浦 71才）

今回の上山は五十年ぶりです。悩みの少なかった若い頃から五十年あまりたった今の自分を、阿弥陀さまや親鸞さまの御影の前で見させて頂きたくって来ました。それから、勝福寺の御遠忌までに恵信尼様のパッチワークを作りあげたく思っています。

渡辺 和義（常徳 66才）

実際に参加して、供奉人（ぐぶにん）の掛け声で坂道を駆け上ったり、沿道の人の合掌など素晴らしかった。「法名伝達式」での「三つの髻（もとどり）」のお話が印象に残った。教えを依りどころとした生き方ができなければ大いなる空過（むなしさ）だけの人生になる。なんとか乗り越えなければともがいている最中です。

渡辺 末子（常徳 62才）

これまでの私は、遡って思うのは、親・祖父母ぐらいでしたが、今の自分があるのは、長い長い歴史といろんな方の関わりがあって生かされていることを感じました。月光先生から「邪見憍慢（きょうまん）悪衆生（あくしゅじょう）」のことをお聞きし、恥ずかしくなると同時に、言い当てられたことで身体があつくなりました。

渡辺 敏晴（中津 76才）

今回の奉仕団に同行、聞法してさらに意を強くしました。これは私が三年前に作った辞世の詩です。

凡夫歳月故遅遅
煩悩興亡笑我痴
天命無情花自落
元知即世任風吹

（「ひびき」94号）